

読書端末の衝撃

「週末寸言」原稿 20100807

「熟田津尔／船乗世武登月侍者／潮毛可奈比沼／今者許藝乞菜」(にきたつに／ふなのりせむと／つきまてば／しほもかなひぬ／いまはこぎいでな)万葉集巻一雑歌 所収の額田王の歌(と言われている)である。このように漢字ばかりで記された標記のことを万葉仮名という。8世紀ごろに著された『古事記』や『風土記』なども万葉仮名によって表記されている。無文字社会日本において隣国中国から借用してきた漢字をどうしたら使用に耐えるものにできるか、上代の人々の悪戦苦闘が伝わってくる表記法である。万葉仮名は、当時中国渡来の新思想である仏典のルビとしても必須のものだった。これなくしては、僧侶の自学自修は不可能だったに違いない。

しかし、万葉仮名をルビに使うのは画数が多くていかにも不便だ。そこでその画数を落としたりのがカタカナで、これならルビとして機能し、しかも日本語の50音だけでよいのだから一気に文字数の削

減も可能となる。

一方、カタカナを当時の筆記用具である毛筆で書くと、角が滑らかになる。この角の落ちたカナをひらがなとして女性が使うようになった。こうして、9世紀に入るとひらがなを駆使して文学を著す才媛達が出現した。清少納言、紫式部、和泉式部らである。中にはちゃっかりと「男もする日記といふものを、女もしてみむとてするなり」と、女に化けて「文学」を発表する男まで現れた(紀貫之『土佐日記』)。かくて日本人は、外国渡来の漢字1セットに、カタカナとひらがなを加えて、7種類の表記方法を駆使すること、文字文化をしっかりと自家薬籠中のものとしてしまったのである。

今年5月、海の向こうから「iPad」という名の得体の知れない「読書端末」なるものが輸入され始めた。先には「Kindle」という名の機械も発売されているから、これらがどのように化けるか。読書端末と言いながら音楽、映像、ゲームまで混交したマルチメディアだ。万葉仮名で起こったと同種の「文化の大変革」が起る日もそう遠くない気がするのだがどうだろう。